

詩歌・小説の中のはきもの (第14回)

大塚製靴株式会社社友 渡 辺 陸

138 竹馬にのって歩く時には、この爪先の感覚が非常に働いていたように思う。その点では高足駄をはいて歩く時に似ているかも知れない。しかし足駄の場合には、鼻緒を足の親指と次の指の間にはさみ、爪先の感覚がほとんど全権を担っているのに反し、竹馬の場合には手で竹をささえているのであるから、足の親指と次の指の間はただ竹の横腹に当たっているだけで、必ずしも竹をしっかり挟んでいする必要はない。従って爪先の感覚は、手首の感覚と共同して、竹馬の脚の先の触覚と連絡し、具合よく体の調子をとることになる。竹馬にのって歩いた時の気持ちで最もよく覚えているのは、この竹の脚の先の感覚である。

和辻哲郎

★『自叙伝の試み』から。靴が履物の中に占める位置が大きくなるに反比例して足指の感覚は鈍くなって行く。竹馬は今もわずかながら子供の遊戯として余命をたもっているが、信じられないことに竹馬に乗っている多くの子供は素足ではなく運動靴をはいたまま乗っている。今の子供は生まれたときから靴をはいているから、指の感覚が鈍麻していて、運動靴を脱いでも同じことなのかも知れない。手の指もゆっくりではあるが足の指と同じ道をたどっていることを大きな問題として意識するべきだと思う。

139 ロンドンの生活、パリの生活のこの涯しもない画廊の中で、われわれはあら

ゆる階層の放浪の女性、反抗する女性のさまざまな典型に出会う。まず最初は、花と咲き始めたばかりの遊び女で、貴族的な様子を目指し、自分の若さと、同時に贅沢が誇らしく、そこに自分の天才と魂のすべてを注ぎ、身のまわりに漂う縹子、絹、またはビロードの広い裳裾を二本の指でそっとかかげ、身仕舞全体にわたっていささか強烈な誇張がなかったとしても飾りの多すぎる履物だけでも身もとの知れるような尖った足を前に出している。

ボードレール

★『美術批評 ドラクローアとギース (河上良雄訳)』から。女性、特に娼婦に、画家や詩人たちは人生の種々相をとらえた。放浪という一点では両者に共通するものがあり、それ故に人生の哀歓をともにできたのだ。娼婦は衣裳、履物で自分が何者であるかを明瞭に示さなくてはならないから、強烈な誇張が必要だったのである。飾りの多すぎる靴は物欲しげでいけない。

140 彼を一介の靴職人から靴のデザイナーに変身させたのは、セシル・B・デミル監督の大作『十戒』だった。…彼はデミル監督から俳優たちの靴の注文を受けると、まず、図書館に入りびたって当時の服装を調べた。しかし、衣裳の資料はあったが靴については一頁の記録もなかった。そこで衣裳からイメージした靴を作った。「ぴったりだ」と巨匠は喜び、

これがきっかけで、『十戒』の成功のあと、…多くの俳優と知り合い、彼らから靴の注文を受けたが、彼の作る靴はことごとく俳優たち、ことに女優たちを夢中にさせた。サルバドレーも、靴を通じて女性の人格をつかんだのである。

草柳大蔵

★『なぜ、一流品なのか』から。サルバドレー・フェラガモは14歳のときすでに6人の職人を抱えた靴屋であったという。奇しくも大塚製靴の創業者大塚岩次郎が靴店を始めたときと同年齢である。「多くの成功物語には『幸運に恵まれた』という表現がしばしばみかけられるが、『幸運』なんてそんなには現われるわけではない。たいていは『幸運』は作られる」と草柳はいう。サルバドレーも岩次郎も無類の努力を続けて『幸運』を捉えたところは共通している。

141 緒のあとのつける足袋ぬぐひとときに

よろひぬたりし心ほぐれゆく
父のため下駄を揃へし喜びに
ひとりつつ吾子は吾を仰ぎぬ
農耕にふみ広まりし吾が足は
たまさかはく靴になぢまず
残されし吾が半生を見るごとし
日溜りに干す小さき地下足袋
待望の改修なりし厨土間
地下足袋をぬぎてスリッパをはく
ハイヒールを交るがはるに借りてはき
病室を歩くしばしたのしく

★『短歌実作指導教室 木俣 修』から。新聞、雑誌から引用した歌だが作者名は省略したという。庶民とはきものの親しい関係が読みとれる。どの歌からも親の喜び、子の喜びを見て喜ぶ父、干された地下足袋から自分の半生を詠み取っている人などの気持が伝わってくる。歌としての巧拙ばかりで読んでではない。

142 けものの皮を着るのはうしろめた

い。かなり長いこと、そう思っていた。“殺生”の2字が瞼の裏に見えたりかくれたりするようで、手を出すことなく過ぎていた。

考えてみればおかしなはなしで、皮の靴をはき、ステーキはミディウム・レアで、などという口の下から、ミンクのコートは残酷よ、もないものである。

向田邦子

★『夜中の薔薇』の「革の服」から。動物愛護団体が時々、有名毛皮店にデモをかけたたりして、店側が折れ、毛皮を店先から引っ込める。生活必需品は良い、ミンクなどは贅沢だから駄目だという理屈なのだろうと思う。しかし、ミンクを飼育し、それで生計を立てている人もいるのだ。散々に鯨を捕獲してきた連中が、今になって保護を主張する。感情的な点で何か共通するものがあるようだ。

143 二度めの宴会を開いた王子は、上靴のはける娘と結婚するという触れ込みで農家の娘たちを招待した。招かれた娘の中に、ひとりずるい娘がいてこう言った。「王子さまはわたしのものよ、上靴にはいるように足を二つに折って結わえておけばいいのよ」

この娘は足をしばってうまくごまかしたので、靴を試す段になってもそれほど苦勞せずにはくことができた。王子は、この娘が、自分の心を取りこにした美しい娘とは違うことがよくわかっていたが、約束は守ると宣言した。そして馬車を呼び、この娘と婚約式を挙げに行くことにしたが、娘が馬車に乗り込もうとしたとき、小鳥が一羽飛んできて鋭い声で歌いながら王子のまわりを飛び回った。

王女さまは足が痛い

王女さまは足が痛い

★『フランス民話集 (新倉朗子編訳)』から。何んかシンデレラみたいな話だな、な

どと面白がっている場合ではない。これは単なる民話ではなくて「寓話」なのだ。日本にもこんな小鳥がいて、「この御婦人は足が痛い、この御婦人は足が痛い」と歌ってくれたら、どんなにいいか知れない。真面目な話、人が自分の身体に正直な靴の選択をするようになる何か妙案はないものだろうか。

144 紐は、もっとも力強く足をサポートする。登山靴がいい例である。我々は、靴だけでなく、靴と紐に足を任せているのだ。仕事着としてのスーツの足元は、しっかりと固める必要がある。疲労度も少ない。紐付きの靴を履かなければならない理由はまだある。服装と靴紐の密接な関係だ。

スーツのボタンは留める。ネクタイは締める。靴紐は結ぶ。留める、締める、結ぶという三つの行為は、昔から、男の服装を整えるために、大切な役割を果たしてきた。三つの行為は、服装を隙なく見せるほかに、精神的な高揚にも繋がる。

落合正勝

★『男の装い 基本編』から。鉢巻たすきとか襷たもと（着物の袂がからむ武士でなく袂のない戦闘服を着ていた斬込隊も）とかゲートルなど戦時中の兵隊はやたらに身を紐状のもので締め付けた。その伝統は今も若者たちに引き継がれて、サッカーのサポーターなど何かというと鉢巻を締めたがる。身体を締め付けるのは日本人の特徴かと考えていたが、西洋人もそれを靴やベルトで行っていたのである。中近東のターバンなども締め付けが基本にあるのかも知れない。

145 靴磨きにもかなりこだわります。靴は革製で10年は履けるものを買います。履く前、脱いだ後には必ずブラッシングをして、靴クリームを塗ったりスプレーをしたりします。脱いだ後は、型くずれを防ぐためにシューズキーパーを入れて

おきます。底が磨り減ったら早めに修理に出します。靴はその人の人格を表わすとされているので、ドイツ人は靴を大切に扱うのです。足に合った革靴を履くというのは健康にとってもいいことです。そういえば、ドイツでは水虫というのは聞きません。

ドイツ人にとっての豊かな生活の条件の一つが、ケアが行き届き長持ちさせた高価な革靴を履くことです。毎日、同じ靴を履くのは、足にも靴にもよいことではないので、ほとんどの人が質のいい革靴を最低3、4足そろえています。

サンドラ・ヘフェリン

★『ドイツ節約生活の楽しみ』から。ドイツ人が靴をどうしている、イタリア人が靴をこうしているというのを繰り返し紹介されるのは不愉快なことである、長い間そう考えていた。靴そのものについては、日本は欧米の靴に劣るとは思えない。しかし、靴に関するソフトウェア、つまり靴の手入れ、服装とのコーディネートなどなどについては学ぶべきことがまだまだたくさんあるのは事実だ。日本人の半数が「10年は履ける革靴」を買う、これ一つを実行することで日本の靴の世界は一変するだろう。